

2 避難所巡回

市内の大規模避難所を巡回し、「外国語による地震情報センター」のちらしを掲示板に貼りながら、避難所対応職員等からの聞き取りや会場内巡回を通して外国出身住民の状況把握を行った。

なお、3月21日(月)からは、福島県のホームページにアップされた避難者リストから外国出身住民らしい名前がある避難所に電話して、状況把握を行った。

ちゅうごくご
ENGLISH と中国語の
じしんじょうほうていきせう
地震情報提供センター
Earthquake Information Center (English & Chinese)

<http://www.worldvillage.org/>
 検索 **福島県国際交流協会**

Fukushima International Association

☎ 024-521-7183 (I.A.D.国際課)
080-1851-4881
Mon.-Fri. (週一-五) 9:00~16:30
Interpreter might not be on site at times.

避難所に貼ったチラシ

月 日	避難所	職員からの聞き取り内容、及び巡回による状況把握
3月15日 (火)	福島競馬場	「当初中国語を話す人が2名いたが、現在は避難所を出た模様」
	福島市保健福祉センター	「外国人は家族と一緒に来ているようなので、現在のところ意思疎通の問題は起きていない。」
	福島県立福島高校	「浪江町や小高区からの住民が避難している。避難所入所者名簿を見ても日本名だと外国人がどうかかわからない。」
	福島県立橋高校	「外国人はいないようだ。」
	福島市立南向台小学校	「外国人はいないようだ。」
	福島市吉井田学習センター	「外国人はいないようだ。」
3月16日 (水)	福島県青少年会館	「当初は外国人が数名いたようだが、今はいない。」
	福島県立明成高校	「外国人はいないようだ。」
	福島県あづま総合運動公園	「外国人はいないようだ。」
	福島県立福島西高校	「名簿上、外国人はいないようだ。」
3月19日 (土)	福島県あづま総合運動公園	名簿上で、葛尾村居住で名前がカタカナの女性2名を確認。職員によると外国人と思われる人がいたとのことだが、それ以上の情報はなし。

3 震災復興版ジャイロ『がんばろう福島』の発行

(1) 発行の目的

外国出身住民や県に縁のある県外・海外の外国人に向けて、多言語で震災の関連情報を提供することにより、不要な不安を取り除き、また、国内、海外からの福島に対する風評を払拭するため、当協会の広報紙である「Gyro (ジャイロ)」の震災復興版を発行した。(平成24年度からは、ブログ版として現在も発信中)

(2) 発行の形式

ニュースレター

- ・仕様：A4判2ページ両面カラー刷り
- ・発行回数：平成23年5月～6月の月2回と11月の月1回 計5回
- ・発行部数：日本語(2,000部)、英語(1,000部)、中国語(1,000部)



ニューズレター版「がんばろう福島」

※創刊号及び第2号については、資料編(P76～P79)参照

ホームページへの掲載

- ・掲載回数：平成23年5月～6月は月2回、平成23年8月から平成24年3月までは月1回 計12回
- ・言語：日本語、英語、中国語、韓国語、フランス語、タガログ語(平成23年9月から)、ポルトガル語(平成23年9月から) 計7か国語

(3) 海外への発信

(財)自治体国際化協会の海外事務所や福島県の上海事務所、JICA二本松など関係機関のホームページとリンクを張り、海外への発信に努めた。

(4) 福島に暮らす外国出身者の声(抜粋)

市内でインド料理レストラン2店舗と中古自動車販売会社を営んでいる。地震発生後、レストランは材料が調達できないため一週間ほど店を閉め、ほぼ毎日市内の避難所で炊き出しをした。(福島市在住インド出身男性 平成23年5月取材)

地震当日は近所の人に招かれて、朝まで一緒に居させてもらい、とても心強かった。(郡山市在住イギリス出身女性 平成23年5月取材)

もちろん放射能は心配。でもこれも私の人生の一部、天命である。平常心でいなければと思っている。そう思わないと生きていけない。(月館

町在住中国出身男性 平成23年5月取材)

放射能が不安。私たち家族は、子どもの学校のことや自分の仕事のこと、両親のことがあるのでここに残っている。ただ時々週末には、リフレッシュのため家族で会津の温泉に出かけている。(郡山市在住インド出身男性 平成23年6月取材)

母国に一時避難したが、大学が始まる5月に福島に戻った。大学に行ってみるとマスクをつけている人も思ったほどいないし、みんな楽しそうに笑顔でサークル活動をしている様子に感動した。(福島市在住中国出身男性 平成23年6月取材)

原発事故後、1か月半ほど妻の実家のニュージーランドに避難。今は普通の生活に戻ってそれなりの生活をしている。1歳になる娘を肩車して散歩するなど自由に外で遊べないのがとても残念だ。(福島市在住ブラジル出身男性 平成23年8月取材)

私が手伝っている幼稚園の半数の子どもたちが家を失い、なかには家族を失った子どももいる。子どもたちに以前の笑顔が戻るようにすること、これこそが私がここに戻った意味と思っている。(相馬市在住メキシコ出身女性 平成23年8月取材)

会津は、放射線の値も低く直接的な地震の被害も少なかったにも関わらず、風評被害によって、とりわけ海外からの観光客が劇的に減少し、農産物は売れない。私は震災後も会津で仕事をするという決意は揺るがなかった。こういう大変な時だからこそ、会津に暮らしている外国出身者をサポートし、復興に協力したいという人たちへ情報を発信していきたい。(会津若松市在住アメリカ出身男性 平成23年9月取材)

今回の震災で、家族がバラバラになってしまった。妻はスリランカ、息子はアメリカの高校。でも私の住むところは福島しかないと思っている。頑張っていくしかない。(郡山市在住スリランカ出身男性 平成23年10月取材)

震災後すぐに5歳の息子と妻の3人で中国に一時帰国。息子は、まだ中国の両親に預けたまま。いつになったら子どもと一緒に暮らせるのか、将来の生活設計が立たない。(福島市在住中国出身男性 平成23年10月取材)

ごはんは、子ども用には県外産米を、大人用とは別にして毎食2釜炊いている。毎日目に見えない放射線と戦っている感じ。でも愛する家族と一緒にだからがんばれる。(二本松市在住フィリピン出身女性 平成23年11月取材)

家族で一時母国に避難したが、仕事のことがあるので子ども3人だけを実家に残して5

月に福島へ戻ってきた。今は、スカイプなどで子どもたちと連絡を取り合っているが、会えなくてとてもさびしい。(福島市在住フィリピン出身男性 平成23年12月取材)

趣味の写真をネットで公開し、県内の素晴らしい風景を世界中の人に知ってもらい、多くの人が福島を訪れてほしいと思っている。(福島市在住エジプト出身男性 平成24年1月取材)

私は福島で暮らして35年。福島は私の故郷。楽しいことを考えて、前向きに過ごしていこうと思っている。(いわき市在住トンガ出身女性 平成24年1月取材)

避難所を転々として8月から福島市内の仮設住宅に住んでいる。浪江には5年前に新築したばかりの家のローンも残っている。いろいろ考えてもしょうがない、なるようにしかならないと思っている。(浪江町在住中国出身女性 平成24年2月取材)

II

4 各種会議の開催

(1) 中核的市国際交流協会ネットワーク会議

- ・実施日：平成23年8月23日(火)10:00～15:00
- ・出席者：県内10市の国際交流協会担当者
(10市全協会が参加)

① 被災状況の報告

市	事務局の被害状況	外国出身者からの相談件数
福島	特になし	2
会津若松	特になし	67
郡山	被災したため、別建物で業務	7
いわき	被災したため、4月末から別建物で業務	79
白河	特になし	0
喜多方	特になし	0
二本松	特になし	0
田村	特になし	0
南相馬	屋内避難のため、4月中旬まで閉所	—
伊達	特になし	0

※会津若松、南相馬、喜多方以外の7市協会は、市役所内に事務局を置き市職員が兼務

② 震災時の外国出身住民への支援内容

- ・パソコンが使えなかったため、海外にいる元国際交流員に英訳をお願いし、ツイッターを活用して英語での情報発信を行った。(いわき市国際交流協会)
- ・FM会津の協力を得て、3月12日に英語で30分ほど情報発信した。(会津若松市国際交流協会)
- ・市業務として避難所支援を行ったが、困っている外国人がいるようには見えなかった。(福島市、郡山市、白河市、二本松市、田村市、伊達市、白河市の国際交流協会)
- ・市内の主な避難所に出向き、県協会からの地震情報センターのチラシを貼って